

〈論文〉

## 蒙疆学院の研究

何 広梅

### 中文摘要

蒙疆学院は偽蒙疆政府管轄地区内の最高学府、成立于1939年4月15日。以培养伪蒙疆政权所需的官吏、教师等中间领导层为教育目的、以日本人、蒙古人、汉人、回民为招生对象。从成立到停办(1945年8月)蒙疆学院毕业生达到800多人、其中日本人毕业生占据370人。日本人的入蒙疆学院的条件是具有大学或者大专学历或者具备同等学历能力的人。伪蒙疆政权设立蒙疆学院、招收拥有日本帝国大学等高等学历的日本人入学、实施长达半年左右的军队式训练的根本目的是什么? 本论文主要以蒙疆学院毕业生的回忆录和日记为第一历史资料、解析蒙疆学院的教育实態、透析伪蒙疆政权的殖民教育本质。

Keywords: Mengjiang Regime Mengjiang Gakuin A colony Leader's education

キーワード: 蒙疆政權、蒙疆学院、植民地、指導者教育

### 一. はじめに

本研究は蒙疆学院の性格及びその教育の実態を明らかにすることを目的とする。蒙疆学院は日本の植民地支配の中堅指導者(官吏)を養成訓育することを目的とし、蒙疆聯合委員会の外局として設置された。日、蒙、漢、回、の四民族を対象に、日本語を教授用語とした。蒙疆地域<sup>1</sup>における「国立」の最高学府とされ、旧来の蒙古学院、察南学院、晋北学院を統合して1939年4月15日に張家口で発足された。

蒙疆地域は日本の特殊地域とされた。特に日本軍部は蒙疆地域を「対赤露作戦の根拠地」として「総てを準戦時体制に置くこと」「絶対不動の根本大方針」とした<sup>2</sup>。蒙疆という特殊地域を設置した理由について、策戦上準戦時態勢に置く必要があること、蒙古民族を指導し漢民族及赤露に対応せしむること、支那を保護するため京綏線を中心に之を西に延長し以て強固なる防共地帯を設けることとした。また、蒙疆地域の特殊性はその経済的、政治的的使命にも表れていた。

蒙疆内外の物資を交易する主要貿易路は張家口を中心とする蒙古貿易路と包頭を中心とする西北貿易路とがあった<sup>3</sup>。この西北貿易は京包線の終端である包頭を拠点として行われるのだが、寧夏、甘肅、青海、新疆といった奥地の獣皮、羊毛、阿片の類はひとまず西寧や蘭州に集められて、そこからその約7割が黄河の水運によって、またその約3割がラクダ商隊によって包頭まで運ばれ、さらにそこから京包線を経て天津に運ばれて海外に輸出される。包頭一年の羊毛の出廻数量は事変前は概ね1,650万キログラム、時変後はほとんど之がなくなった。天津から輸出される羊毛をその原産地別に見てみると、その内訳は、蒙古産の羊毛が30%、新疆、青海、甘肅、寧夏産の羊毛が60%という割合になる。羊毛に次いで阿片の取引はまた大したものである。綏遠の阿片は既に定評があり、その阿片は綏遠地方から産出されるもの

ばかりではなく、遠く寧夏、甘肅、青海方面から搬入されるものが大部分を占め、一年間の取引量は約 30 万キログラムでその約 20 万キログラムが京津地方に輸出される。このように、包頭を拠点とする西北貿易は、経済的に言っても蒙疆にとって重要なものだが、それと同時にまた、政治的に見ても極めて重大な意義を持っている。というのは、包頭の貿易は回教徒の掌握するところであって、蒙疆全体の回教徒の数は僅かに 94,000 人ほどだが、寧夏、甘肅、青海、新疆から遠く印度、中央アジアに及ぶ一帯は、回教ルートとして緊密につながりを持っている。ここを狙ってイギリスは勿論、ドイツもロシアも回教工作に懸命になっている。蒙疆から言えば、北に外蒙古に堺して防共壁を築いているが、また西北に対しても回教ルートに働きかけて、防共ルートを建設する西北工作と関わり、西北貿易の復興という経済的使命を持つと同時に他方に雄大なる政治的使命を持っていた。蒙疆地域における一連の傀儡政権の樹立に伴いこれらの特殊使命が大きくクローズアップされた。

関東軍は 1937 年 9 月に国民政府の傅作義軍と察哈爾作戦を展開し、察哈爾省南部 10 県を管轄する「察南自治政府」を樹立した。同年、10 月に山西省の北部 13 郡を管区とする「晋北自治政府」、次いで同年 10 月に察哈爾省の大部分及び綏遠（現在、呼和浩特）を含む内蒙古西部全地域を管区とする「蒙古聯盟自治政府」を樹立した。日本は上記の三つの傀儡政権にそれぞれ「自治権」を与え、「官心安定を第一」<sup>4</sup> に分権分治の政策をとり、政権基盤の安定を図った。1937 年 11 月 22 日に三つの自治政府の上に蒙疆聯合委員会が設けられ、徐々に適度の中央集権化を行いつつあった。1939 年 9 月 1 日前記三自治政府を「蒙古聯合自治政府」として統一し、政治・軍事・経済・文化各面において植民地行政の完全な中央集権化を図った。蒙疆学院は蒙疆地域の植民地的特殊使命を果たすべき植民地行政の中央集権化を図る措置の一環として創設され、現地人に対する建国意識の涵養<sup>5</sup> 及び事変前の抗日思想の払拭と親日思想の樹立という教育方針の統一を目指したものであった。

1937 年 9 月から 1939 年 9 月頃の蒙疆地域の教育政策は「民生向上」「民族協和」「防共」の政治スローガンに即した教育要領を掲げた。蒙疆政権の民政部に属し、教育行政と社会行政を所管する役目になった留岡<sup>6</sup> は当時の教育の状況を事変によって閉鎖された学校の復興、抗日教育を親日教育に改めること、特に抗日教科書の焼却及び満洲国の教科書を一部改訂またはそのまま使用することだったと指摘する。しかし、現場における植民地行政の不浸透による現地人官吏の日本的要素を考慮する意識の乏しさがあげられる。モンゴル人の文教政策を担当した陶布新の「蒙古聯盟自治政府」の教育方針の制定過程における民族復興を中心とする教育方針がその日本要素の乏しさを物語っている。「蒙古聯盟自治政府」の教育の方針及び学制に関する法案の制定に当たって、陶布新は中華民国の教育制度を真似して作成し、実行に向けて政務委員長徳王の許可まで得たが、「日蒙親善」の日本的要素が含まれていない理由で岸川顧問に反対されたことを回想している<sup>7</sup>。蒙疆政権内の高級現地官吏を日本の教育方針の元再教育することが蒙疆学院における現地指導者養成の目的だったと言えよう。

本稿は蒙疆地域における日本のモンゴル人に対する学校教育制度研究の一環である。蒙疆地域におけるモンゴル人に対する学校教育研究はほとんど空白な状態であると言えよう。蒙疆地域における日本語教育を論じた宝鉄梅<sup>8</sup> と包賀喜格図<sup>9</sup>、それに蒙疆の教育政策を検討した祁建民<sup>10</sup>、蒙疆の留学生事業を取り上げた田中剛<sup>11</sup> などがある。また、劉国彬<sup>12</sup> は蒙古学院を事例に蒙疆地域の教育理念を概観しつつ、蒙古学院の設立及び授業内容、卒業生の動向を軸に、蒙古学院は官吏、教員、技術者等の人材不足

を補うこと、体育教育と日本語教育の強化に重点が置かれたことを指摘した。これらの先行研究は蒙疆地域におけるモンゴル人に対する学校教育を実証的に論じ、「蒙疆の教育は満洲国の教育と形式や内容において少しの違いはあるものの、実質的には同じだった」<sup>13</sup>と一言で片付ける研究空白を補いつつある。しかし、教育の立ち遅れ、それに第一次資料の不足から蒙疆地域の教育研究の進展は見られない。本研究では日、蒙、漢、回の四民族を教育の対象とした蒙疆学院において、なぜ大学卒の日本人学生が教育されたのか、蒙疆学院の教育は何を目指していたのかを日本人卒業生の日記や回想録を用いて検討し、蒙疆地域の最高学府における教育の植民地の一側面を明らかにする。

## 二. 蒙疆学院概説

蒙疆学院官制<sup>14</sup>によれば、蒙疆学院は蒙疆聯合委員会総務委員長の管理に属し、蒙古政府所要の文官及び教員を養成訓育することを目的とした。これを第一部と第二部に分け、修業年限は一年以内とした。第一部の学生は大学・専門学校卒業生または同等以上の実力を有する者にして、実質的には日本人向けとなった。第二部の学生は中等学校卒業生又はこれと同等以上の実力を有する者にして共に選抜試験に合格した者とし、蒙疆現地の諸民族の人々を対象とした。また、その第10条では「総務委員長必要ありと認むる時は地方団体又は特殊会社若はこれに準ずる団体の職員を蒙疆学院の委任学生と為すことを得」と定めた。新卒から採用した学生は入学と同時に委任官として特定の給与が与えられ、入学から在学中のすべての費用（被服、図書など）が蒙古政府より支給された。勿論、現職官吏から採用された学生は原給が支給され続けた。学院卒業生は蒙古政府の官吏その他政府指定の職務に服することが義務付けられた。1941年6月、蒙古聯合自治政府の機構改革に伴い、蒙疆学院は政務院長管轄となり、中央学院と名称を変え、名通り蒙疆地域の教育の中核的な役割を果たしていた。表①のように、1939年の蒙疆学院は開設から1945年8月の閉校まで、第一部では日本人学生約370名、第二部では現地系学生約500名、合計870名ぐらいの卒業生を出している。学習期間は第一部日本人学生が3ヶ月から6ヶ月で、第二部現地系学生は殆ど一年間だった。

表①蒙疆学院における入学卒業在学状況

第一部			
入学年月日	卒業年月日	学習期間	何期（学生数）
1940年4月	1940年9月	6ヶ月間	第一期（140）
1940年12月	1941年3月	3ヶ月間	第二期（44 現職のみ）
1941年4月	1941年9月	6ヶ月間	第三期（現職24 新卒28 合計59）
1942年6月	1942年10月	5ヶ月間	第四期（31）
1942年10月	1943年3月	6ヶ月間	第五期（24）
1943年10月	1944年3月	6ヶ月間	第六期（44）
1944年10月	1945年3月	6ヶ月間	第七期（25）
第二部			
1939年6月	1940年3月	10ヶ月間	第一期（蒙26 漢30 回14 計70）

1940年11月	1941年9月	11ヶ月間	第二期（75 現職のみ採用）
1941年10月	1942年10月	12ヶ月間	第三期（75）
* 上記以外第二部では第四、五、六、七期は毎期約70名入学と推定される			
* 1944年に第二部に日本人中学卒業生20名ぐらい入学。（*推定のもの）			

注：『蒙疆学院（中央）学院史』より筆者作成

では、蒙疆学院にはどのような人たちが集まったのだろうか。初代蒙疆学院長は蒙疆聯合委員会総務委員長で親日派と言われた蒙古政界の元老レベルの卓特巴扎普<sup>15</sup>だった。しかし、実際には京都大学教授の田辺寿里副院長がその運営統括に当たった<sup>16</sup>。1940年4月から第一部日本人学生の入学とともに陸士、陸大の陸軍エリートコースを歩み、張家口警備司令官だった常岡寛治が院長となった。1942年3月常岡院長の辞任に伴い、陸士卒業後、陸士教官、歩兵第22旅団長を経た黒岩義勝が院長となり、殆ど軍人畑の出身者が蒙疆学院の教育を統括した。1945年3月黒岩院長の現役復旧に伴い、北京の日本大使館嘱託の成田氏が副院長として着任し、同年6月に中国通の学者だった武田南陽が院長となったが、戦況悪化のため就任後わずか2カ月で閉院に至った<sup>17</sup>。蒙疆学院創設時の教職員には東大卒で京大教授の田辺寿利と京大卒の鷲谷嘉兵衛、京大卒のモンゴル研究者の江実、東京外語で天理外語教授の小島武男などが招聘された。日本人入学生は蒙古聯合自治政府現職官吏より採用と新卒採用の二種類だった。新卒から採用された日本人入学生の出身校は学歴が確認できる63人の内、天理外語7人、東大5人、京大5人、関大5人、日大4人、拓大4人、東北大3人、明大3人、城大3人、東京外語2人、中大2人、善隣高商2人など日本各地から集まっていた。

### 三. 蒙疆学院の教育理念—民族協和か植民地化するか

京大教授の田辺寿利、京大卒の鷲谷嘉兵衛と江実、天理外語教授の小島武男などの教授陣を集めた蒙疆学院だった。しかし、これらの教授陣の在任期間は短く、殆ど3ヶ月から長くて2年ぐらいで、既卒生が第二部現地系学生の教育乃至第一部日本人新入生の教育を担当する有様だった。第7期生を除き、第1期生では4人、第2期生で2人、第3期生で1人、第4期生で2人、第5期生で2人、第6期生で3人が学院配属となっていた。第一部第1期卒業生140名中穴戸武男、武谷比古根、寺部清部、鈴木昇の4名は学院配属となり、寺部は蒙古人生徒の指導兼舎監を担当した。鈴木昇は学院総務科属官兼院長秘書で第二部現地人学生及び第一部第二期生の教育を担当し、行政の拠点をめぐる現地体験教育に関する連絡、設営、学生の引率を担当したという<sup>18</sup>。第6期生の小倉が第一部第7期生の担任となり、「浅学菲才の私はむしろ学生から多くを学び取る教官で、山崎君は、練成を強いる私に、「教官、私には中国の仏像などを見せて頂くほうが、よほど練成になります」などと、私に頂門の一針を与えてくれたもの」と蒙疆学院における練成の教育実態を回想している<sup>19</sup>。1939年12月半ばから蒙疆学院の教官となった江実は1940年12月頃『蒙古文化研究所』に籍を移した。なぜ、学者たちの転職が激しかったのだろうか。一時期蒙疆学院総務科長となった杉浦長三郎は「行政整理に関連して大量転出希望者が出て、常岡院長が休暇をとって内地から辞表、転出希望者も異動し、教職員の三分の二以上が去られ、学院は一時空白同然の状況」になったことを回想している<sup>20</sup>。京大の鷲谷嘉兵衛は転出希望者の一人だったが、1940

年田辺寿利副院長の兼務が解かれ、現地旅団長で張家口警備司令官だった常岡中将が赴任してきてから、学院の空気は一変し、教官及び新院長を中心に意見が対立して何かしら面白くない空気が漂うようになった<sup>21</sup>。常岡院長の部下で1940年8月に蒙疆学院に就職した水野義郎は次のように回想している。「日系第一期生は、間もなく錬成期間を終わろうとしていたが、軍隊式のこの錬成は教官先生の努力にもかかわらず、一桁も二桁も違うつわもの学生には一向に通じず、院長自らの指揮ということになった。これが「重謹慎」の乱発となった。朝礼後、院長室前に引き出された「重謹慎」候補者は「カミナリオヤジ」の光る目の玉と声の大きいのに肝を冷やした。中にはヒゲを切られていた学生もあった。一方、職員たちにもお構いなしに「カミナリ」は落ちていた。遂にこのカミナリのため院長退職の動きともなってしまったようである<sup>22</sup>。さらに、鈴木晋は「常岡院長の真面目かつ一徹な軍人氣質が、学生には一つの示しとなっていたが、いわゆる文化人である教官や行政経験の豊富な幹部らとの関連での部内運営には問題があったようだ。軍人と文化人との間には、凡ゆる問題の価値判断が異なり、それがために常岡院長は孤立する形になることが多かった。例えば、大陸政策における内蒙古の最前線的あり方についても、院長は軍政による植民地化政策を言い、文化人側は民族政策による王道楽土を説き、これがため学院の基本的教育方針についてさえも、思想統一ができない有様であった」<sup>23</sup>という。日本の大学・専門学校卒業業者または同等以上の実力を有する者を蒙疆学院において、6ヶ月間に渡ってどのような教育を施したのか。結論から先に言うと、蒙疆学院では「道場型」の錬成<sup>24</sup>が行われ、如何なる方向に指導力を発揮すべきかが徹底的に叩き込まれたと言えよう。戦時下の植民地支配に当たる指導者にどのような資質が求められ、それをいかに形成させようとしたのか。蒙疆学院の教育方針と教育綱領がそれを端的に示している。創設時の蒙疆学院の教育方針及び教育綱領は民族協和のもと、植民地指導者として錬成することを教育理念とした。具体的には次の内容を掲げた<sup>25</sup>。

- (一) 蒙疆学院学生は各各その民族的特質および目標を有しつつ、而も彼此民族何れを欠くも立ち得ざる運命共同の地盤に立つ当政権内に於いて、民族の協和解放の実を挙ぐべく、さらに政権の統一的秩序の確立に参与しつつ、以て政権の東亜における特殊重要性を完ふせしむる任務を有するを以て、之が為に特に高邁なる識見の養成と鞏固なる意志の鍛錬とを重んず。
- (二) 各学科は現実的具体的事態の処理指導に必要な原理的並びに实际的知識を授け、常に実習、実態調査、座談会との連関に於いて之を行い、また学生の民族的、個人的特質、志望などの差異に従い、各専門部門の演習、実習を通じて、各各の自発性、独創性を発揮せしめ、以て民族指導者たるの資質の涵養に留意す。
- (三) 学院生活、特に寄宿舎生活を通じて教職員と学生との人格的接触を図り、思想、人格の徹底的理解と向上とに努む。

また、蒙疆学院創立時のその特色を次の四項目に掲げた<sup>26</sup>。

- (1) 日蒙漢回四民族協和の模範道場であること。言わば、言語、宗教、習俗等其の伝統を異にする日本人、蒙古人、漢人、回民の四民族学生が起居、学習を共にして民族協和の模範道場であること。そして、将来アジア共同体制樹立の基本的課題である民族問題の具体的解決を図ること。さらに、蒙古聯合自治政府の根本目標を実現すべき政治的文化的重大使命を負っていることが強調された。

- (2) 官吏道の確立と徹底に留意すること。蒙古聯合自治政府の高級官吏は今後原則として独り学院出身者より採用する方針なるも、学院は唯単に官吏の養成機関たるに非ずして、政権の目標に準拠しつつ、最も高き文化水準に立ち、最も裕力なる精神内容を抱懐して、以って政治並びに文化を指導する素質の養成に重点を置く。殊に蒙疆の地域は民族の複雑性に応じ其の言語、宗教、習俗の多岐、従ってまた民族の生活、心理の錯綜せるところなるが故に、これが向上と協和を図り、大同和楽の力を結成せしむべき官吏は、既成の概念を以って事を処理するが如き安易の方法によりては到底其の職分を全ふし得ざるものにして、不斷に民衆の生活、思想に留意し、茲に高度の獨創性と自発性とを發揮すべき事が要求せらる。従って蒙疆学院は在来の学校教育に於ける強制訓練、強制教授を批判して、学生の獨創的自発的修業の伸張につとめ、「官吏は民衆の師表たり」との標語の下にこれが自覚を促し、謙虚にして宏大なる氣宇を養はんとす。
- (3) 蒙疆政権の重要性に鑑み高度の政治性と學術研究との総合的統一を期すること。蒙疆政権の課題のみならず、世界の課題でもある共産主義思想、またはこれによる抗日思想及び運動、そしてこれらの温床となる執拗な自由主義思想を克服して、政権の内的秩序を確立し、東亜の再建に邁進するには、常に深く内を究め、また広く世界政治文化に通達しなければなりません。そのため、学院は院内に研究部を設けて自ら諸般の研究調査を行い、あるいは、訪れてくる諸学者または日本から招聘する専門の教官、教師を動員して、研究探検を行い、學術講演を実施し、国策企画に資すると共に、学生の教学内容を豊かにし、政権全体の文化向上に貢献する。
- (4) 各民族に応じ其の特徴を伸長せしむる教育を施すこと。各民族学生の特徴を十分に伸長するため、各民族特有の運動、娛樂機關を設け（例えば蒙民学生の相撲、乗馬、音楽、漢民学生の籠球等）、また宗教上特殊なる戒律を重んじる回民学生のためには特に禮拜堂、沐浴室を設け、その勤行に便宜を与える。また、日本特有の剣道、柔道の施設を計画して日本人学生のみならず他民族学生にもその長所を学ばしめんとす。

1940年11月25日より、その教育方針は「政府の施政綱領に則り四族の学生を收容し、本地域の地理的、歴史的特殊性を認識せしめ、防共第一線の総動員体制を整備するため、現地に即応する如く官吏その他の者に必要なる教育を施す」<sup>27</sup>となった。その教育要領は民族協和を強調しながら民族別に定められ、日系官吏に対しては「蒙疆特殊事情を習熟せしめ実行力の涵養に留意し以って四族の先達たるの自覚を促し、さらに官吏の中核たらしむ」<sup>28</sup>ことが強調された。「蒙系学生に対しては蒙古民族の興隆を期せしめ經濟、教育及び牧業に関する知識の向上を図り、さらに衛生思想を強調して保健に留意せしむる」<sup>29</sup>とした。

#### 四. 植民地指導者教育の実態

蒙疆学院規定によれば、第一部及び第二部における一週間の学科目及び授業時間数は表②の通りだった。第一部における学科目は興亜精神論をはじめ、植民地語学の取得を目的とする語学以外、蒙疆の特殊事情を学ぶ行政、法政、財政、教育、比較宗教学などの科目が用意された。また、蒙疆聯合委員会各部専門家、軍、興亜院、政府、各特殊会社の専門家による蒙疆の農業、畜産、鉱業、交通、

治安に関する特殊講義と重要問題に関する座談会などを設け、兎に角、蒙疆地域に関する学生たちの認識を深める科目ばかりだったと言えよう。

表②蒙疆学院における第一部の学科目及び授業時間数

学科目	時間	概要	備考
興亜精神論	1	蒙疆政権の特集性、東亜新秩序の必然的動向に関する現実的、論理的解明とその指導精神の把握	他に適宜院長訓話を行う
語学	12	日本語、漢語、蒙古語、チベット語、アラビア語	
行政	1	中央、地方行政論、民生	蒙疆の特殊具体的事情に即す
法政	1	国家組織論、司法論、行政の基礎論	蒙疆の特殊事情を主眼とす
財政	1	中央、地方財政論	同上
経済	1	経済一般論、日本経済より東亜ブロッグ経済の基礎論、産業論	ソ連、ナチス経済の批判
教育	1	教育本質論、教育行政論、教育と民族	蒙疆の特殊事情に即応す
比較社会学	1	諸社会の比較研究、民族社会学、蒙疆社会の特集性	唯心史観及び唯物史観による社会理解の批判
比較宗教学	1	比較宗教学一般及び特殊	蒙疆及び四圍の宗教事情に関する解明に重点置く
比較言語学	1	比較言語学一般及び特殊	蒙疆及び四圍の諸民族言語の具体的な事情に即す
アジア文明史	1	アジア諸民族興亡の社会的、経済的、政治的、文化的基礎、西洋との対比	特に近世より現代に重点を置く
地理	1	蒙疆並びに四圍の自然及び人文地理	
国際事情	1	欧米事情、隣邦事情	
特別講義	2	農業、畜産、鉱業、交通、治安等	委員会各部専門家の外軍、興亜院、政府、各特殊会社の専門家に依頼す
軍事学	1	日本の大学、専門学校軍事学教程に準拠し戦史、国防兵器、戦術を講義と実地と関連して行う	
訓練	7	軍事教練、特に小部隊の指揮法を習熟させる、武道	馬術、自動車操縦法
実習		実務実習、実態調査、	後半において施行す
座談会		重要問題について行う（委員会各部の専門家及び軍、興亜院、各政府、各特殊会社のその他の有力専門家を中心とす）	
見学旅行		蒙疆、北中南支、満洲	

注：『蒙疆（中央）学院史』より筆者作成

蒙疆学院の一日の様子を蒙疆新聞は次のように記していた<sup>30</sup>。

一日の激しい日課を終えるのは夜の10時半である。自習室のストーブの火も落ち四辺は深々と冷えてくる。身体は綿の如く疲れている、それでも学生達は書を繙きペンをとっている。不寝番に立った学生の見廻る靴音がかすかに聞こえ、夜は寒寒と更けて行くが、自習室の灯は未だ消えない。午前7時、暁の光も未だ見えぬ暁暗のさ中、週番の打ち鳴らす起床の鐘が校舎の静寂を破る。忽ち教官が校庭に現れ、一斉点呼が開始される。闇の中に黒影がキビキビと動き号令が響きわたる。終わって洗面、室内清掃、それより一同神殿に座し、朝の神拝が行われる。祝詞、明治天皇御製等が奉唱される。

それが済めば学生達は三々五々長城に上がって行く。長城は中国の最大の遺跡である。今や石垣崩れて苔蒸すとも、幾千年にわたって繰り返された蒙漢角逐の歴史はその壘壁深く刻まれ、蕭条と吹き渡る朔風は戦士の雄叫びを偲ばせて止まない。その壁の上に静かに建つ英魂之碑に跪き、学生達は興蒙の道に殉じた諸先輩に続く事を心に誓うのである。之に続き十二月は寒稽古が課せられ、裂帛の気合と竹刀の響きが長城に欲する。その汗を拭う間もなく校舎内外の清掃その他の作業である。八時に食堂に入り、一汁一菜に高粱饅頭の粗飯を、戦陳荒野を偲びつつ嚼みしめるのである。

十時から学科である。基本課目として大東亜建設の理念、民族問題、思想問題、アジア史、蒙古政府行政概要、興蒙施策大要、外蒙及び西北事情大要。語学として蒙古語、華語、ロシア語。軍事として蒙疆戦史を含む大東亜戦史、防諜、作戦要綱、応用戦術。術科として官吏服務心得、体操、教練、武道、馬術、作業。その他特別講義、軍隊宿泊、現地訓練等が課せられる。

卒業生たちの日記や回想録から総合的に分析すると、第一部各期における教育の実態は各期によって少しの差は見られるものの、全体的には全員管内居住の内務班編成の軍隊式の教育形態をとり、大まかなカリキュラムとして主に精神訓話、講義と座談会、入隊訓練、軍事教練と実態調査、卒業旅行から構成された。以下では主に卒業生たちの回想録及び日記を用いて、蒙疆学院における教育がどのように展開され、学生たちがどのように受け止めたのかを検討する。

精神訓練は蒙疆学院のすべてのカリキュラムに貫いていた。具体的に卒業生は次のように受け止めていた。第三期生の久保寺二郎は、「学院生活で特に精神鍛錬と志気高揚に意が注がれ、院長自らの精神訓話が連日のように行われ、訓話の後に必ず感想文の提出が求められた」<sup>31</sup>という。第二期生の稲村久伝は「常岡院長の早晩朝礼の訓示は、まさに峻厳そのものだったし、秋霜烈日の気魄に充ちて、若者を発憤興起せしむに十分であった」<sup>32</sup>という。第二期生の奥田福雄は「常岡院長の訓育桃太郎談義は有名で、気は優しくて力持ち犬猿雉を心服させて異民族統治の心構えを力説強調された常岡精神が今以って忘れられない」<sup>33</sup>という。第二期生の出羽時男は「院長は毎日諄々と皇道の理念を説き、政府日系幹部としての心得、使命を講ぜられるのだが、吾々は深い感銘を受けて蒙古建設の礎石たらんと若き情熱を燃やしたのである。只管国を憂い、大東亜建設の理念を語られ、皇風遍く大御稜威の本義に及ぶと院長の考え方はその精神面で一段高い次元なので、吾々には一般論としては理解できても、それ程の感激は無いのである。院長は訓話講義が佳境に入ると自ら感激され、その都度吾々は威儀を正し、「君が代」の一節を斉唱し、東方を遥拝する。余韻未だ去らずしては更に「ああ今日の天気のように良い気持ちだ。もう一

回「君が代」をということにもなる」<sup>34</sup>という。

講義について卒業生及び教職員による回想は少ない。第二期生で卒業後学院勤めとなった宮川貢は政府高官による講義の実態を次のように記している。「講義は、院長始め各教授によるほか、政府の最高顧問始め、各部局の顧問による講義で、特に金井最高顧問の蒙疆政府成立の理念についての講義は感動を覚えるものであった。蒙・漢・回民の民族共存共栄による王道楽土を築くという理想の上に立って東は、満洲国境、南は万里の長城以北、北は外蒙との国境とするが、西方の国境は定めがないことについて、今後更に西方に発展的に伸ばしてゆくもので「能動国家論」と称されたことはいつまで金井さんの識見と理念の深さに感動し深く記憶に残る事態である。」<sup>35</sup>

1940年6月1日に学院創立1周年の式典の後、第一部日本人と既卒現地学生は交歓座談会が行われた。既卒者からは待遇の悪さ、日系官吏の横暴、民状の窮乏などの話が浮上したが、院長はこれに対し、窮迫のところがあれば学院生の給料を提供しても良い、横暴官吏は殺しても良いとさえ極言し、二宮尊徳を例に挙げて諄諄と説き、蒙疆建設は1日にして達成されるものではないと説得したという<sup>36</sup>。また、現地人同様の粗末な食生活を強要した精神訓練には、多くの卒業生は苦痛を語っていた。

入隊訓練について、第三期生の田口守三郎<sup>37</sup>は次のように回想する。「蒙疆学院における勉強の中心は、軍隊教育を通じて占領下の治安確保のため敵あれば戦闘し、武器を敵より奪えばそれを活用できる能力を育てることだった。そのため、在張家口部隊（歩兵、工兵、通信、自動車、野砲、山砲）を一週間から二週間の短期入隊訓練を受けた」という。このような入隊訓練はその他の卒業生の回想録にも多く語られ、蒙疆学院の重要な必修科目だったと言える。第三期生の永森規一は「学院に入ってから二ヶ月が経ち、寮生活に慣れてきた6月に、服部歩兵隊を皮切りに、山砲、工兵、通信、自動車の各部隊を廻って訓練を受け、山砲隊では、4人がかりで砲を据え付け、「撃ち方用意」「撃て」と交替で号令をかけあったことが懐かしい」<sup>38</sup>と回想する。

軍隊式の錬成以外、蒙疆学院で最も重視したのが体験学習だった。「学内より寧ろ学外での訓練が鮮やかに記憶に残っている」<sup>39</sup>というように卒業生たちの回想録も学外の体験学習に偏っている。そのため、蒙疆学院における学外における体験学習が最も効果的だったと言えよう。このような体験学習が第一部日本人入学生の半年の学習期間の少なくとも一ヶ月以上を占めている。蒙疆学院における体験学習の実態を卒業生の蒙地旅行の日記より分析する。内田菊雄は1941年4月に蒙疆学院第一部第三期生として入学した。彼の日記は蒙古奥地旅行における体験学習の様子を次のように記録していた（一部略あり）<sup>40</sup>。

1941年8月21日 午前5時30分起床、6時点呼、続いて朝食。自動車よりの3台と学院の車を併せ4台の野見山指揮官以下57名（日本人学生34名、漢蒙学生23名）、4班に編成、8時20分院長訓示を受け8時40分出発する。張北街道を直進、11時30分張北県公署着、忠霊塔に参拝の後、公会堂で昼食。午後2時出発周りの耕地が進行と共に草原にかわりつつあり家畜の放牧が所々に見え始める。午後6時15分徳化に入城、宿舎公会堂に入る。午後9時県公署より係員来訪、徳化の歴史等について説明あり。11時消灯。

8月22日午前6時起床、7時30分朝食8時45分出発西スニットに向かう。一番車の大本君急性盲腸で所在の特務機関を煩わし後送は残念。ここの幼年学校を訪れ120名の元気な蒙古少年たちと

交歓、午後4時ラマ廟見学。本日の宿舎は特務機関前の草原にテント設営、キャンプファイヤーを囲んで夕食を終わったのは午後9時半。

8月23日午前6時起床、初めて草原で一夜を明かす。今日より当分草原暮らし。徳王主席の招待により年一度のオボ祭を参観。午後4時、オボ祭りに別れを告げ再び担担たる草原を走る。約一時間を走った頃ノロの群を発見、広漠たる蒙古草原でのノロ狩り。午後7時ホルトンスムに着く。10時半夕食、ノロの野戦料理。12時消灯。狼の夜襲に備え歩哨二人一時間交代でテント前に立哨する。

8月24日ホルトンスム出発、11時30分ザリンスム着。昼食後12時30分出発、再び草原の旅を続ける。午後6時15分頃第二番車ハンドル故障でブレーキと同時に転覆横倒しとなる。我々15名外に放り出されるも草原の上で大した怪我もなく他班の協力も得て午後8時一応修理なる。オールドスム手前20kmの地点で第三番車右前輪をはずしエンコしている。オールドスムでの夕食は11時半になる。天幕は各班毎に建てアンペラ2枚を敷きその上にゲートルを着けたまま防寒外套着用、毛布を掛けて寝る。今夜も狼の遠吠えが聞こえる。

8月25日連日のトラック旅行で疲労加わり起床午前8時。第2番車ハンドル修理、第3番車パンク修理。出発はマンマンデー午前11時。午後5時20分貝子廟着。特務機関補佐官松浦少佐より明日の予定地国境の街ラマクレスムについて簡単な説明注意あり。今夜の設営地は機関横の草原と定め、炊事班員を残し他は付近の漢人の一団によって営まれている売買家見学。ラマ廟を中心に2千余の蒙古人を相手に砂糖、食料品、雑貨など日常必需品の販売を行っている。彼らは満州方面から仕入れてくるとの事。色々この辺の経済機構について研究する。夕食後9時から10時まで牧野機関長を迎えて蒙地における経済的・政治的現状について話を聞く。

8月26日午前9時30分出発、11時半第4番車ガソリン漏れのため停車。二時間余修理に努めるも修理できず。乗員は3班に編成替え、3輪に分乗出発。午後8時10分にラマクレスムに着、忽ちラマ僧が車を囲んで歓迎してくれる。特務機関の好意により支那家屋を借用。この部落を最先端として内外蒙国境50キロは無住地帯であるとのこと。時おり外蒙兵の越境、密偵の侵入、一般住民の脱走等あり機関員のご苦労さこそと思われる。午後11時夕食、12時消灯。

8月27日午前6時起床、朝食前にラマ廟見学する。ラマ廟は蒙地のどこの地に行っても他の建築物と比較してはるかに立派なものが多い。草原の中に煉瓦造りのチベット風な三層楼は他を圧して堂々たるもので、この地ではまだまだ経済的にもラマ教の力が強く支配している事がうかがえる。午前10時15分いよいよ第一線をあとに帰途に就く。迂回してダブスノールに午後12時40分に着。蒙古語でダブスは塩、ノールは湖で、湖の表面は氷結したスケートリンクに似て、人間が歩いても沈まない驚くべき湖である。手に探ってみると実に美しい純白な天然塩で、何ら工業的手段を加えずそのまま使用でき、この付近の住民は無尽蔵の塩に恵まれているわけだ。夜は再び貝子廟に泊まり、28日ザリンスム、29日ホルトンスム、31日午前1時30分学院に到着する。

そして、同年9月5日から16日までの十日間は第2回目の京包線沿線訓練旅行が実施された。京包線沿線訓練旅行は主に京包線の沿線の大都市である大同、厚和、百靈廟、包頭、オールドス、黄河を溯り斉図へ、そして帰りも同じコースだった。このような体力に対しても限界的な旅行を通じて、体力の向

上を図ると共に、「学生をして蒙地の実体にふれ見聞を広め、かつその現地現場に親灸せしめ、以て蒙古育成に必要な各般の実地指導訓練を施し、日系中堅官吏として必要な素地を練磨すること」<sup>41</sup>を目的とされた。その旅行の全過程においては、観察しての感想、行政的対策といった点で、頻繁に答案が求められたという<sup>42</sup>。「講義を聞く場合、あるいは旅行中、どんなところで突然災が起きるかもしれないので、急に答案用紙を配って、一枚に、或いは二枚に、時には三行半に、というような内容でその要旨を纏めて院長に提出する、自動車が止まった、と思うと、突然状況を説明、答案用紙に的確な行動、判断を記載提出することが求められる」<sup>43</sup>。瞬時にして的確に状況を把握し、最も適切な判断と措置を講ずることをこのようにして訓練されたという<sup>44</sup>。旅行中の課題と学生の答えを一例あげる。第一期生の金丸の日記に西湾子旅行記が記載されていた。その中に蒙疆地方の植林についての課題に対し金丸は次のように答えていた<sup>45</sup>。

この問題を書く前に昭和14年度、阪神地方の水害を思い出す。この原因が何故かは周知のところである。衆人が中国各地で河を見る時、水がないのに大なる防水堤があるのに驚く。これは山に樹木がない為と思う。然し、蒙疆地方は牧畜を以て第一産業としている関係上、造林地の少ないことも考えられるし又育林に必要な降雨量がないことが挙げられる。この為河川の兩岸を主として林木が育っている。この育林の対策としては、始期に於いて、この地方に育ち易き品種を植栽し、ある程度大きくなった時点で水分蒸発が少なかった時、はじめて実用的な品種を植林する事が最も可とし、この方法に依れば、かなりの所においても造林は可能であると考えられる。然し牧畜との関係は多に考慮すべきと思う。

この答えから現地の実情を考慮した上で「実用的な品種を植林する」という資本主義的観点から蒙疆地域を改造する視点が見られる。このように、蒙疆学院における教育は正に第一部第一期生の寺部が指摘するようなものだったと思われる。「蒙疆学院では豊富な体験学習を通じて、絶えず自己を見詰めるトレーニングができたこと、そして学院における毎日が自分の持っている全エネルギーとの闘いで、花火の出るような日々であった。小学校から大学まで集大成した人間陶冶の場であった。ある時は3メートルもある土塀を飛び越す競争をしたり、またある時は溪谷を徹夜行軍した。要衝の地で提起された問題に対して、5分間で感想や解答を書かされたりもした。このことは、この地の政治、軍事、経済上の諸条件を常に把握し、また全体と個との関係を洞察するような学習態度を習慣づけた。このように私達は身心の訓練を通して、この特殊地域の特性を政治、産業、軍事、社会の面から叩きこまれた。」<sup>46</sup>。

## 五. 終わりに

蒙疆学院の教育の重心は、蒙疆を如何に植民地化していくかの一点に置かれた。半年間の教育を受けた卒業生たちは蒙疆政権の各機関に配属された。第一部第一期生の事例でいうと合計140名の卒業生は、それぞれ総務部8名、民政部55名、治安部18名、司法部3名、財政部10名、産業部20名、交通部7名、牧業総局12名、地政総署3名、蒙疆学院4名となった。それぞれの配属先で蒙疆建設に尽力したと多くの卒業生は回想している。ここで卒業生たちの活躍の典型的な事例をいくつかあげる。

関大の時百日を超える大陸旅行がきっかけで卒業後民族運動のロマンに走り、蒙古政府受験を決め、蒙疆学院第一期生として入学した寺部清毅は、1940年9月30日蒙疆学院卒業後、学院に残り第二部蒙古人生徒の指導及び舎監に当たった<sup>47</sup>。1941年12月に巴盟公署へ転勤となり、盟公署最高責任者である参与官の秘書となった。暫くして豊鎮県の参事官の補佐官となり参事官職の勉強をし、約10ヶ月で巴盟公署総務課事務官となった。1942年12月1日で第一期生初の県参事官として察哈爾盟尚義県参事官に任命された。1945年1月宝源县参事官に転出して敗戦を迎えた。県参事官は日本の知事と同格であるが、権限ははるかに広範囲で司法、行政を一手に握り、文字通り生殺与奪の権限を持っていたと寺部は回想する。また、多くの参事官の仕事の半分は現地駐屯部隊との折衝やご機嫌伺いで、専ら駐屯部隊の高官たちとの人間関係にその精力の大部分を注ぎ、その結果、民生政策が疎かにされていた植民地行政の実態を寺部は指摘している。だが、寺部は軍に対しても一応の礼儀以上のご機嫌とりはせず、一途に民生安定に打ち込み県政では抜群の成績を上げたという。

山本実は1942年11月3日大陸に渡り、蒙古政府職員として蒙疆学院に入学した<sup>48</sup>。1943年5月に蒙疆学院卒業後巴盟公署民政処地方科に配属され、半年間実地見習として勤務した。5ヶ月後の1943年10月豊鎮県公署民政科指導官として赴任。雑穀の供出という集荷仕事を担当し、出荷の督促に連日馬で回り、農家の出荷の伝票を見せて貰い、未供出分を早く出荷するように要請した。政府の買い上げ価格が閾値より安いので集荷は困難だったが、戦争遂行上の要請とは申せ、現地人百姓を苦しめることは、第一線職員にとって心苦しいことだったが、理解と協力を得るための努力を続けたという。1944年10月涼城県公署民政科へ赴任し、現地のカトリック教会におけるベルギー人とドイツ人が30年以上慈善事業と信仰の道に奉仕し、小中学校、孤児院、授産所、織物工場を経営して成績を上げていることに大陸で日本人が受け入れられるべき一方向を示すものと考えていたことも蒙疆建設への模索として評価できよう。

須佐誠は1940年4月蒙古自治政府に採用され、シリングル盟貝子廟に勤務した<sup>49</sup>。1943年冬、現地職員として蒙疆学院に入学し、1944年5月繰上げ卒業した。その後、シリングル盟地方股長に、1944年11月に東アパカ旗代理顧問になった。「蒙古政府下部公署から召集者が続出し、勝つために第一に軍需物資の供出である。私はそれに専念した。傍ら旗民の生活用品の導入にも努力した。康保県参事官に依頼し、食糧品を導入し、大蒙会社との交渉はもちろんだった。だが、私は日本に大きな力を入れた。特に、軍馬供出については、シリングル盟割当の内未達成の頭数を一手に引受け、東奔西走して東アパカ旗で補充供出した。」という。

また、東大卒業後恩師の菌部一郎先生に薦められ蒙古政府に就職し、蒙疆学院第三期生として入学した尾崎克幸は「私たちは、蒙古を第二の故郷と思い定め、民族協和によって大東亜の繁栄を実現することを私たちの目的としました。蒙疆学院はそのような同志の塾でありました」という。1941年9月蒙疆学院卒業後、察哈爾盟太僕寺左翼旗顧問補佐官に任命され、同年12月に千葉の鉄道2連隊の補充隊に入営する命令を受けた。顧問補佐官としての3ヶ月間で長野出身の塩沢顧問と北海道出身の表指導官につき、旗の実態を学ぶとともに、ジャサック（蒙古王公）の娘に日本語を教えたこと、左翼旗の乳牛改良に必要な優良な種牛購入のために北京の明治牧場へ出張したこと、バター製造のバターペーパー買付のため北京領事館の人と各国租界と中国西辺地区に牧場を持つ各国人を訪ね、最後にロシア人と買付契約を結ぶことができたことなどを詳しく回想している。

このように近代化から大きく立ち遅れていた蒙疆には、高い学歴と能力を持った人材が集まり、卒業生たちは蒙疆建設に微力ながら尽力したと言えよう。しかし、多くの卒業生はその配属先は転々と頻繁に変わり、戦況悪化に伴う軍隊召集も加わって、蒙疆地域を如何にして日・漢・蒙・回四民族による王道楽土の地にすることは夢に終わっていたと考えられる。

1940年1月に蒙古政府に入り、文書係として勤務し占領下における政府の立場もそれとなくわかるようになってきた田中守三郎はこれから蒙古政府の行政をやるなら、蒙疆学院に入学し勉強することも意味深いことと考え、現地官吏として応募することを決意したという<sup>50</sup>。このように、蒙疆学院は蒙疆政権における重要な行政組織の一つで、蒙疆学院の教育を受けた人は優秀な指導者として重用される仕組みになっていた。しかし、蒙疆学院における教育はその優秀な能力を発揮する方向、いわゆる植民地支配に欠かさない植民地侵略的視点、さらには皇国民としての人格を錬磨する道場型の錬成を行っていたことは間違いないだろう。1941年10月9日に蒙疆在住日本人に対し皇国民としての人格を錬磨するとともに東亜新秩序建設、特に蒙疆建設の意義をしっかりと把握させ、これを顕現するのに必要な識見と実行力を養うため、在蒙疆日系軍官民首脳者を網羅する「蒙疆日本人錬成協会」<sup>51</sup>が設立された。その協会が蒙疆学院を道場に一ヶ月間に渡る錬成を行っていたことも、道場型の植民地指導者の錬成を行っていたことを裏付けできる。

本研究では蒙疆政権において学校系統上最高学府と位置付けられた蒙疆学院における日本人学生に対する教育の実態と卒業生たちの活躍を概観し、蒙疆学院は道場型の植民地指導者の錬成機関だった性格及び現地体験学習を重視した教育の実態を明らかにした。現地人に対する蒙疆学院の意義については今後の研究課題とするが、蒙疆学院の創設に伴い、学校系統上モンゴル人の蒙疆地域に進学できる最高学府は蒙古学院から蒙疆学院に変わった。モンゴル人指導者を育てる蒙疆最大規模の教育機関の蒙古学院は中等教育機関と格さげとなり、蒙疆学院へ卒業生を送り込む立場となった。稿を改めて論じることとする。

## 註

- 1 蒙疆とは内蒙古とそれに接する北支那の辺疆とを合わせたもので、北は外蒙古、東は満洲国、西は寧夏省、南は陝西、山西、河北の三省に接する地域である。その面積は五十万七千平方キロメートルで、当時の日本の本州、四国、九州及び朝鮮を合わせたものと同じぐらいの広さだった。総人口は550万人で、その中でモンゴル人は30万人、回民は10万人と推定され、その大部分が漢人だった。本稿ではこの地域を蒙疆地域とする。
- 2 寺坂亮一「蒙疆地帯事情に関する件」『蒙疆地帯事情(他)』、南満州鉄道株式会社、1937年。
- 3 留岡清男「蒙疆の教育と文化(其の一)」『教育』第7巻第6号、1939年6月、781頁。
- 4 杉浦長三郎「転勤八たび」前掲『蒙疆学院(中央)学院史』、154頁。
- 5 宇野善藏「蒙疆教育概況」『東亜同文書院大学東亜調査報告書 昭和14年度』、東亜同文書院、1940年、989-1025頁。
- 6 前掲、留岡、783頁。
- 7 陶布新「偽蒙疆教育的忆述」『内蒙古文史資料(7)』、内蒙古人民出版社、1982年、172頁。

- 8 宝鉄梅、『満洲国および蒙疆政権におけるモンゴル人教育に関する研究』新潟大学（博士論文）2005年。
- 9 包賀喜格図「蒙疆政权时期日语教育史研究 —以《满洲国語》中的相关记述为中心—」大阪大学中国語文化フォーラム、2016年6月。
- 10 祁建民「占領下の蒙疆の教育（特集2「大東亜共栄圏」と教育—日本教育学と植民地支配下の現実）」『植民地教育史研究年報』(2)、1999年11月、83-91頁。
- 11 田中剛「蒙疆政権」の留学生事業とモンゴル人留学生『歴史研究』(38)、2001年3月、99-137頁。
- 12 劉国彬「蒙疆政権」下の対蒙古族教育に関する考察『中国四国教育学会 教育学研究紀要』(54)、2008年。
- 13 中国少数民族教育史編集委員編『中国少数民族教育史第二巻』雲南教育出版社、1998年12月、87頁。
- 14 蒙疆（中央）学院史編纂委員会編『蒙疆学院（中央）学院史』、1992年6月発行、351頁。
- 15 札奇斯钦『我所知道的德王和當時の内蒙古（二）』東京外国語大学アジア・アフリカ語言文化研究所、1985年、67頁。
- 16 金井章次 著、田辺寿利編『満蒙行政瑣談』創元社 1943年、P339。
- 17 小林俊春「武田南陽院長を偲ぶ」前掲『蒙疆学院（中央）学院史』、92頁。
- 18 鈴木昇「『晩想録』から」前掲『蒙疆学院（中央）学院史』、125-130頁。
- 19 小倉好房「忘れぬ人々」前掲『蒙疆学院（中央）学院史』、149-152頁。
- 20 杉浦長三郎「転勤八たび」前掲『蒙疆学院（中央）学院史』、153-156頁。
- 21 鷺谷嘉兵衛「在蒙懐旧短片」前掲『蒙疆学院（中央）学院史』、111頁。
- 22 水野義郎「学院生活の思い出」前掲『蒙疆学院（中央）学院史』、156-158頁。
- 23 前掲 鈴木昇「『晩想録』から」125-130頁。
- 24 鍊成に関しては寺崎昌男の研究を参照されたい。寺崎昌男『総力戦体制と教育—皇国民「鍊成」の理念と実践』東京大学出版会、1987年2月28日。鍊成は1941年3月、国民学校令第一条が「国民学校は皇国の道に則りて初等普通教育を施し国民の基礎的鍊成を為すを以て目的とす」と規定されて以来、戦時下学校教育の最高目的として1945年までの日本の教育界に君臨した。
- 25 小島武男『蒙疆学院便覧』（非売品）。また、前掲『蒙疆（中央）学院史』42-44頁。
- 26 同上、42-44頁。
- 27 同上、27頁。
- 28 同上、27頁。
- 29 同上、27頁。
- 30 前掲、『蒙疆（中央）学院史』46-47頁。また、『蒙疆新聞』1944年2月5日。
- 31 久保寺二郎「学院と私」前掲『蒙疆（中央）学院史』229-230頁。
- 32 稲村久伝「学院生活で得たもの」前掲『蒙疆（中央）学院史』197-199頁。
- 33 奥田福雄「学院生活とその後の思い出」前掲『蒙疆（中央）学院史』207-210頁。
- 34 出羽時男「蒙疆学院と常岡將軍」、前掲『蒙疆（中央）学院史』133-135頁。

- 35 宮川貢「蒙疆学院の思い出」、前掲『蒙疆（中央）学院史』135-137 頁。
- 36 前掲『蒙疆（中央）学院史』。
- 37 前掲 田口守三郎、235-239 頁。
- 38 永森規一「蒙疆の思い出」前掲『蒙疆（中央）学院史』240-243 頁。
- 39 甲斐弦「滅びない青春」前掲『蒙疆（中央）学院史』140-148 頁。
- 40 内田菊雄「蒙地旅行の思い出」前掲『蒙疆（中央）学院史』218-222 頁。
- 41 同上。
- 42 塚田軍「在蒙思考」前掲『蒙疆（中央）学院史』211-215 頁。
- 43 同上。
- 44 同上。
- 45 金丸「成紀 735 年西湾子旅行記」前掲『蒙疆（中央）学院史』272-276 頁。
- 46 寺部清毅「悠々たりや大河」前掲『蒙疆（中央）学院史』1117-125 頁。
- 47 同上。
- 48 山本実「大陸の人々」前掲『蒙疆（中央）学院史』251-254 頁。
- 49 須佐誠「湖北の十五年」前掲『蒙疆（中央）学院史』256-258 頁。
- 50 田中守三郎「蒙古についての回想記」前掲『蒙疆（中央）学院史』、235-239 頁。
- 51 「日本人錬成協会の結成」『蒙古』1941 年 12 月号、112-113 頁。